

かたてり  
書名

961-1

俳諧資料カード	
年代	11 宝暦己
編者 (筆者)	半崎
書名	新編遠太記
備考	明治5年刊

(下垣内蔵)

續安達廷太良根  
藏書

續安達廷太良根

叮寧堂發行

叮寧堂

由原籍  
和田正借藏書

正借

大正



手如那禮

時を既平

後何如解の

月見の章

月見の章

猿橋峯

又

猿橋の峯

月如人

八十八歳

半時庵

壽庵

宝曆三年八月二日

先師生涯の事業辱く遺教を受く  
且將來年奥羽に於て託し併て  
美名を弼致す一々其の如く星霜い  
くはく歴ある身重任に於て是に  
小由て也今茲明和也又新舊の同志  
あり年牛身を推して之に於て  
架か張美名のみを以て希望ありて  
焉ん也

於古浦居士 水元其梁識

安達者良根多先師吉時庵  
夏羽新御乃一集也其梁の如し  
机立てるに祝賀有りよせあは勢  
く其續編を輯録するハハハ  
さし或終る東奥の節を曳へた  
素意他念ふといやあはハハ  
たて致景中 到らんとそ

先居きとこへよ

集もろみとそ

竿秋

萬有等其梁叟吉時庵先師遺  
流乃一文兩章明らる形あり  
あつて立机か一集都鄙なりと  
免る四とたふまきあつて諸  
好士乃投玉群をかまき事なり  
賀一とそ

五十坪ふた

道照る坊月此人

只清

賀正高亭師翁

山嶺下秀峯より高し梅の花  
 餘寒の多かり了子あり川  
 乾澀に眼も春冷そよ吹雪  
 明いろくを好みきるる所  
 いらくらと聲もあつと舟り波  
 測もあまき也 浅き石菖  
 霞の向もあけてる気好る月おのり  
 去るの蒸火り菓の條をはく  
 梅助

陽て馳走きり次糸如縁る心  
 思り勢仗ひ雨り遠山  
 別路の余所目ふあら裏つる心  
 外に面似菩薩内心か  
 糸ももゆるふ橋をぬ津波  
 よろこも毛物ぬきき  
 まるぬきぬ帳をねむし着り入  
 不性さを秋りるぬ後し守  
 月日のくく鶺鴒の眠る岩  
 季風  
 如蝶  
 又之  
 我妻  
 夏卜  
 甘曲  
 花王  
 三光  
 東籬  
 惟風

栗うち子京へたまふりおちるこ  
 白馬金鞍恥きかきまき  
 琴本弾く壳と志し花うる  
 さあふおのひのふとる小柳  
 生玉也木ら芽も人哉呼子る  
 あゆふうりまら猿のかしこさ  
 申つりと帆の並ひし朝ちり  
 寺かろ里へ鼻月子を曹才  
 鼓子花と暑く夕うちるる海  
 賃損ふる銀子りありふ

亞亭  
 如巴  
 我妻  
 都石  
 王雄  
 子丁  
 梅助  
 梁花  
 如蝶  
 又之

其後と封しと多し動章うつ

と水かかふ事標流とせよ

片しと愛小有度キ磨崖の碑

歳暮の礼子贈ふの御嘉刺

後うらと魚とありりろ

置是古簿りうはる候言

神祈り袖りこを(暁の月

戴く白子昔も系はる

磯子る海この房もふるん

る者より芳更あうる雪

廿四  
 友下  
 三光  
 是五  
 惟澄  
 東籬  
 孝風  
 亞亭  
 子丁  
 梁花

飯運ふ拙ふりつともあまのま

如巴

醫師子賞ふ杖子十二支

梅助

世の中の塵はあふく暮る家暮

夏卜

さくもをふく赤紙の風巾

都石

山陰も花子儲けの如くは築

如蝶

いとも遊ふれやまをたし記

執筆

高亭先生の文臺部を祝す

樹に染く於香もや峯の杏

如蝶

良夜をそと鏡を祝す

雲を月影を祝すの鏡屋系

我才

文臺部を祝す

浪花

名手照る如梅子さびる車舞

亞亭

全

甚句ひ楚り入建梅の冬乃あ

梅助

影高し藍を足らん如花

廿四

名水月也子里は中は還き子舞

東籬

雨のこころは梅はかく中をいんり

吹起り梅のま川の花はみ

又之

世言す海無き有る

世く廣し道は岩戸を明の梅 果花

奥あまの林蔭を塵の梅乃志 三光

嵩高き人なきはさるる梅

道照る如湖川勢あま同くきん 星洲

全

八おとひりも榮あるは梅 花王

道長し世をふれずし梅乃志 夏卜

梅乃志の梅乃志の梅乃志の梅乃志

梅乃志の梅乃志の梅乃志の梅乃志

八多梅也世をふれずし梅乃志 星雄

告てゆく道は榮を

神を感りぬる梅の垣根を 都石

賀

暑をふく免梅こえ花は東大寺 千下

苦 葵

叢岳のこけりもあはる暑をさる 原花

一 蓮

らるかく古みふ梅乃志乃那

味歌重代の家より十徳備りては  
宗匠よりかこしめりてふきり別まのめて  
十徳一衣引きひきり自他申さるる事  
宗匠よりかこしめりて痛きもの多し中ふ  
此ぬらと云西舞の韻何となく願う  
き学むかてらりて誰う敢て其上よりや  
とらふんま時菴をよびてのあはれ節を  
引きか詠まを慕ひて續安達方良  
根の一集をよみてそのころさ  
少かり告是ぬん蕉あり所謂

風流を始ふるべき

と新也毫道のを奥り田く人歌 修古

水元其梁雅伯

半首菴老人の徳をよむ其業を終ん  
あきらむ秋の氣をあらはたせよのねたま  
如うう後世に厚意を謝す

月花の通り葉肉やよみぬ心 京 鳳世亭 金下

歌仙

東武

青柳必直下李言涉香川

千石

風ひあすく多州より電

只清

牛車石車より暮の秋

全

長い火縄を土手小鷲く

千石

馬馳走ら松へまふ月を陰に

全

何いら時計も秋知子形

只清

恥く多急むら一忘是り大踊り

全

身清う虫あて法句苦ふさる

千石

裏門表出合うら女後帯

全

七条横へ遠入家ケントン

只清

斯う植てく山を延き春の鏡

全

時多かり眼を是ふき季

千石

神をいふやう好まふ鈴をいふ

全

系圖より多はの流一敷好

只清

二日月氷柱折せ歌くらん

全

布をたて流れ川端り人

千石

坊を指花ふき多う玉弁袴

全

味のあふり春乃兼燭

只清

二 妻あを向ふ心ある文字山

全

蝶の下ワシ乳母の愛を  
 女房より下子から我御山  
 されば時珍も曰 大毒  
 定ちきり欠ひさけの船は飯  
 四月に旅を下戸に呵ら  
 先達ハ又むつゝのた傳授す  
 長命をあやうり早邊  
 挨拶は法ある處を源氏雲  
 親の良見もききぬ三男  
 約束ハ無言子出あより十の夜  
 千石  
 只清  
 千石  
 只清  
 千石  
 只清  
 千石  
 只清  
 千石  
 只清

秋は蕨のむつ流うむ屋  
 茶物は是も妙法蓮華經  
 年々おまが坐蒲不血の障り  
 老人を茶粥は生活を婦  
 多よりきたたへて入る鯉  
 いろくみ派も神の國は  
 袈裟のうら系遊ふあま  
 千石  
 只清  
 千石  
 只清  
 千石  
 只清

過はる幸掌山亭の出合  
 山茶花のをろたも捨ぬあま  
 千石

千石の女しり山景急平謝守  
そねふう々其執きそ春のつれ

其梁

昂興

東武

晴るるりるあるもあやちきん

志成

細谷川へ喉弁る瓜

只清

善土臺の紋り光陰費申ん

全

枝はくとたを咬う隊大

志保

一枝をいさよふ月子憎もる

全

陽分あふふた荒磯の岩

只清

東略

其梁子久一た快あり門

弟時至るこころ始て文臺の

披し事茂賢

浪速

柳の墨如花も下和ら光うか

嗅洞

こ其梁の娘一と回内か入る中

予よりも嫌きこしと能返る

たくやいさハ免所もさよしと

既予六の漢文其臺をた

聞一句をそそ祝す

同

香る天り跨進返さかふん子

舎仙

賀一集

安達方良り流をーと  
奥より細道ちそかく如く  
延びし立しの集ふ家号けて  
續あそく花乃根に長くはひ  
こゝろを人事を修す

斯くはふ素かつや松乃実

舎持

春曙

春の也春を松豫の朝切け

其果

歌仙

さ波や梅らもさ成崩色堀  
燈をさす海を渡し呼ぶ雉  
耕ふかりし海に字を耕し  
面白た穴一ツある石  
男孝子鏡あそへー海の月  
あそみ遊そはく萩の小屋  
神の糸吾を槐乃念さる  
獨り笑ひもおりに初恋  
眉散そ先京り方うち眺え

泉州貝塚

非石 山波 仙奴 仙松 蜜蛤 都柳 美雲 非石 山波



碧踏む鹿乃泣を通ひ路  
 吹留り時春ふ方の一むら  
 るは車の音そふ寂し  
 申のワ多きうふるさる矢大長  
 多妙くも發表り刑  
 弁輿ふくさそ吐てさ旅  
 日較指折春おむく  
 都柳 英里 山波 仙奴 仙樞 雙峨 瓶筆

通題

其梁芳名人の文臺ひたを笑す

暹一や多る系り月さか直新

弁外金

瓶筆

全

甚るるあり申さる踏さ

極香舎

瓶筆

水元其梁謙伯文臺南を祝す

通題三句

若葉

法眼妙吟齋

百子を来しを止はる系り

林芝竹

月

双へる田毎の月より中筆錢

時雨



東武子旅霞して

字茂出く州子入向也ちきん

淀

桃舟

能因之花を尼子節を引く

入連 青紙り包んて土産可也

梅

日小眠休半 如春ふち小梅乃を

同

何光

時雨

くく多也 二度友を 春あふ屋

其果乃然一 羊首蒼宗匠の命

小まうを文甚室を續閑きあふ屋よ

ろこひあゝの杖り表を以祝す

雀亭

初霜ややうふ 富士を勢峰の和 朱尋

徐歩

梅乃をまとも 尽ん月おう物 生果

月

備後

四十貫村

古曆

名月也 鶺鴒通るるをさかふしを 虫の音やうをうりて通らふ物

新不會恋

片そきたる花より二月の雪は袖

寄名所恋

安見ゆ今を松浦ら苔は花

忘伯新恋

えぬ子より戸より子さこころ堂か

契源新恋

葉を朽く日下曲道糸の本末よみ

賀

文世堂也心く言葉糸の花は春

大海

峯華

通歌梅

漁言のまの道は五丁梅は花

舎仙

立

とこまてそ舟をきりあんなのさ

嘆同

多言月朔日

少女おその民はちわら梅は花

立

隆専寺あり

たつ星とらん如歌の糸さく

冬松

浪義藤舎り吟

定府

菜の花は海子よる丸よと云暖抄

蘭徑

備前  
新越

嵩夕

梅

備前栗寺

記号の来る岸を嘆くみ花梅の色

蟻城

水雞

霞閣より望み入る北きぬさうき

十三夜

小指山今宵そ月のかへき

初冬

月子かゝる山顔や一木よりあみこ

春日立田河のて

経

たての糸斗流も如春あは

梅助

胸窓

扱乃残る五月の曙や肉刀帯

風郊

はさみ水くちなる石菖如く

只清

伊賀生進洞後乃麩回め

全

あ味覚ええ旅をきむ家

菅部

雪代の高屋庭返色の杉如月

全

ちりあじときむら 椎名

全

ワキあくも只くちしく目今虫

全

灸あききり乃杉末も雲

全

あちりし終る一人のそと顔

全

春世親父は月花ハ苑

只清

右面吟催りて庭前依りて春の  
るあまの依りて下畧

春窓

うたろをはききし梨の雨

白 紫下

倦夜

法外子月も飲おのあつき夜

焮寒

おのしも既し雨乃ハ露ハ流

閑中雪

雪乃鹿山のゆききききききき

半時菴寮ハ蕉翁乃跡を去る初春

くもり浪義の市中ハ徹して乾五彩乃

道人ハ湖ハ水ハあまのいりて身を寄

如鳴呼畿内乃俳哲義乃あふいふ

其果逸互獨久しく泉南子筆を階を

六く呻吟の既し札を建ててあま

骨髄を著るはいさや乃美あるを

文臺ト咲く也四花を牡丹

浪卷 竹浪



何と云ふ愧は木をふるふい  
 僧ハ笛を戸乃垂脂小手紙つ  
 とふ遊人とも内を淋しき  
 そ如原やを落小磨し謙乃清  
 月てらしくとも中織る皺  
 ふ負しきさ少しも恥に子如業  
 子如士心ひ出しかる風を伸  
 伯母り手小育ち短きうしろ帯  
 二日とハ赤き 新町乃雪  
 鶴よりき鶴の高うく届たて  
 雪 浪 助 上 雪 浪 雪 物

我の拙さは之を孝石乃寶殿  
 案しきき任所如赤まきか一窓  
 浮世のき活しあつ如晴天  
 快う咲花ころ 國家先  
 あつさたるあつ 暖ふ民  
 助 浪 雪 上 芦冠

泉南の其梁子文甚を云ふ水一葉賀し

朝日影心く矢暮也一乃毎  
 我上

春真

梅のまゆもあけぬう向ふ椿子の塙

苦熱

暑小逢ふ女の憎き夏責の南  
十五お子如刻より清光を燈り  
射るるを幸きつゝ中はおも存を

初冬

浴はる名女み向ひきり一雨  
外題標

梅咲也の味ある梅乃家

若葉

餘花の星照多やそよや

浅人 き海

海道一乃大河

人々赤やみ膝ハ揺るや大井川

浪卷 秋助

高より教日して愛と至る

逢おふ事不二を思つたのきこれ学

三井寺夜歩吟

恍惚を詠きん三井寺は膠月

春のよ人乃多鐘聞くお那

秋興

枯蔓や昨日をむらゝ虫さゆき

良夜

琴彈て去り陶せん望まじき

多武峯奉納

日六源春志のうらうらと藤の波

萬草のぬし一集を習う

浦雨やよましく其名呼子る

元七梁のうら半門子変秀と雅風

東西よりぬく人をも祝す

去る如火や又き雨呼ふ柳陰

端午

去るやうなき幟も軒端叫

富雪  
舍椽

寄松戀

ははらまゝと涼一常盤の名

皂夾

蚊よもそと燈京木より舟

石室

銅表屋根小五日より雨をまき

崔獅

帛紗より新目あらやふし

四州

唐音より始る去曲園に有

室

一人手尔於茶椽の餅揺

夾

秋乃波名の不自由な寺より必

夾

釣るまゝ竹葉中樂焼より土

夾

揚屋より揚屋へ揚る如き又揚

夾

夏跡を去りて春物あり  
白切り源もあらしく暮れ雪  
法のいほゆり棒と脊をく  
あま潮を喚ぶ子跡一途に大  
駿河茄子の具えりて月  
物つりけりたはこ嫌ひも旅衣  
忽然と一きり白張りて自基  
花の比後を様も 由けも此  
浦生を刻む故下湯秋  
系遊少也 卯毛文字り 因西

柳、州、柳、共、室、柳

恋の川らぬ所並をある  
朝出合あきほりてお志りある  
鈍い流をゆり 漸る 滝  
氣根え高津天神太融寺  
較系た馬 日る返し小大膽  
以次等その次子ある 聲啼く  
余は子時一なる 安家一ふし  
御筆簾紙のくらおもてふき 桂影  
紫山子も妻あをそめて 婦りきや  
三階の手あらしの 鳴る 鳥も如花

室、柳、州、柳、共、室、柳

風画き捨る酒は醒ゆる  
 夕日さくら向ひ在詠の舟おろし  
 孫子叩く逢ふ花一みそき孝  
 又賭ふ肩たまりし一見高笑ひ  
 赤流るる藤は雪やけく人  
 出まかゆまの山等珍花まか雲  
 炭の葉を定ぬあま春  
 州室央州粉夾

液雨  
 外ふり實まき松のしん丸  
 其梁

歌徳 春興

河波や舟を眼は友むめ此巻  
 珍鯛あはむる貝もを川紅  
 去の心あま賣産頭伊執り  
 好み定ぬ人さま一まか窓  
 指を折る影をまろ消え舟の雲  
 破子と返る中袖の糸あま  
 孫もとる際治疾を乃神司  
 出まかぬ奴もハあまか  
 夏里 其梁 只清 里 果 清 里 台

兼くしる下を賣すか雲井宿  
 うりまも交るをみまら味  
 いろくしり世話をみいたる衣  
 荒井くんさる茶かんの山  
 巨魁折を氷室り山北月  
 拂ひハヤむとたう季唐音  
 立回鼓り飯の切まら賭跳  
 太一字おちろくんの年  
 嘉例で古一家の末此寺り花  
 高瀬り首まんゆら学

梁 全 清 全 梁 全 雲 全 清 全 梁

妻よりをまぬれいりくまをさか  
 退くく戻さる白虎湯飲む  
 かゝるそくちりて年々の雲  
 是眼子啼くもあむもも海る  
 憂きまも金鍊親仁神をま  
 ちり少く道具垢離してる  
 ちりくく此鏡を天顔の上ま  
 是うそまをく色日おやる顔  
 侍女り小まごりくおる役をり  
 名親まはるく欠る

梁 全 雲 全 清 全 梁 全 雲 全 清 全 梁

さそひて入札船乃朝の月  
紹路極手進心端幅  
去臨乃雨を夜守る月の光  
催馬樂去り此差すの節季の  
孫手代九十六の賀すもむらん  
禮務と應之きり 中着  
山の井也 汲るも流に極極  
能めは却りそくく虎杖  
全 果 全 清 全 里 全 落

咲むけり樹の根深し義乃人

富田林  
分蘆

暮乃江也氷下画む見如月

泉州岸和田  
拾奇  
概字

若葉  
春夜脱捨る雨の姿葉の系

名月也遙をくく後一守

時雨

夕立の年此寄るる時心うり

奇松恋

黛乃みくも多し 念 拍子

梅

風よ訪て管明方志破列梅

りあ葉

る晴窓に神も宿らばあ葉垣

月

天よ夜に歌ふ一城り月

時雨

此君と音を争ふ一と籠る雨

あき恋

吹夜に浮名を松り花いろ

洞原舎

梅屋

梅

むめの香に跡 躑躅と松の僧

泉岸

歌船

あき恋

恨なきあき恋 園衣りのあき恋

月

浦陀と居り月お庭にあき恋の節

時雨

法衣を穿て申す原り時雨かあ

あき恋

休一級松に後を著 彌生あ

梅

毛を脱換する白鶴如く雪の標

村巴

時雨

片山をいすの庵うせし久きを

雪後清光吟

同

積む雪如後の君子と碑の月

波急

ぬききをたむひ今をたむひの人こそ

其深の如し机をたむひの

踏む跡も手紙の玉のこり代り通

笑橋

池塘

お世に越ふる雪もみもふんぬの花

里雄

お筆の氷もそそく榛

春の心鶴如く梅味遠くみ

はるり梅の標も明志の如く

三日月也梅も七古の垣隣

葉舟のり半中お

お建る烟の末り鶴の如く

叔父小語はより也欠落

お心しる梅窓子人いろ

上  
身をいりしと蘇妙なる大  
法ハものゝ旁者此中ニ武蔵坊  
隆文ハ月々仕官止さ勢  
扱勢在存扱勢とあり車  
新縁見つけハひらき茂打  
かぞ燕をいりしはさし 薔園狩  
騎射のいりしはさし  
こゝろまこと澤多雨り花使ひ  
妾此縁衣離衣相侍  
日お扱中夜二の道いりかまひ駕

入  
不斷補陀庵自隨と流ふ庭  
噴鼻下かつちる雲此岸何見  
長寝乃眼をも時多此羽  
唐松のいりしはさし  
河表洲子栖む人ハ沙流流  
朝態て二見乃湖衣喚く見  
跡くは笑ふよくしりし  
彩衣遊てき疑ふ流ん衣  
法为暮さるし叫びよふ賜  
鞅立も出まこころよき杉の月

いさむ恨ま鏡うら虹  
うたふく風を樂むうしろ帯  
富士見の方のそり砂の下手  
大音て涙の報いさむる婦し  
申多し漕くハハを返む舟  
宗祇又色蕉幾世も花は笠  
あそむ道は松永たま

寒夜

火中拳に樹皮おもふまゝうた

墨雄

梅

水色を見え之が坂やんめ花

如標

多葉

抱く風の福よく配る若葉うた

月夜雲あり

月々宵たしをふりて雲の繁葉

液雨

枝折戸をまぐくぬ露の時を

新炆

桐一葉小姓は眠るあしし

葛亭主人の文甚ましくきき祝して中絶る

幾千里手長と伝む久の心気

蘆月

春 霄

梅くらし空も幾ぞる梅う那

苦 熱

動の如き守るや噫のきうし

月 照 海 邊 徐 歩

山 近 く 波 も 音 亦 き 月 又 う 華

郊 外

狐 火 を 横 子 流 せ し 程 之 也

春

春 候 也 土 榴 乃 苦 小 履 如 添

操 之

夏

騰 舟 の 幸 冷 甚 多 舟 あり 谷 清 あり

秋

詩 八 雨 子 芭 蕉 如 字 紙 洗 び 系

冬

隈 亦 甚 秋 月 の 乾 う 如 幾 時 あり

七 夕

夕 夕 寝 の 一 如 何 是 也 天 如 川

其 梁

萬亭主人の故半時菴子隨身  
一筆下月不道を渡り白を練り  
まじり湖意を掌握して英才を揮  
る其時既に今月今日

猿搗下名を先越三月此人

挂外舎

寛三

時鳥

笠婦きのあけ月うふかきたる

冬景

こわしく此川を堆朱の岩間う那

半時菴老人乃道の高きを致し遠き  
いん志を四寸告て近時流行り風舟  
をあらしけり四也一此胸襟曠を覗き  
しと知を家不在ても必閑ふるは何ぞ  
烟叢雨笠乃炊勞を事とせん集物と  
そ此風流を起る多へ一居あつるを身  
茶の遐陬下及んこととを賀凡

尋

はぐ塵を足をもくもそ落り葦

三峰

思ハ長キ日西ニ

終古

去のの磯下帽舟乗捨る

金下

檜垣下 穂垣下 方けふる  
 いろく 下月夜をそふ山 續き  
 糊子ちろろ 女身一 採寒  
 繪ちかぶ 新正の十 炬燵着し  
 懐きほろろ 衣吐き 相惚  
 ちやくむら 女若 損ふも 京をゆく  
 従生 石き 琉球 表 神  
 古<sup>納涼</sup> 女連 来てハ 取出寸 紅土 連  
 如るい 湯浴 返 詞をが  
 初 花 吹 顔も 甘 煎 帝  
 峰 生 華 下 秋 峰 古  
 金華 塵生 竿秋

静子一首 源方まけ 景  
 名ある 月余は 一々 志進 さまあは  
 年中 大立 法心 揃 留守  
 須磨ハ 飽は 見あふ 花の 切を 連  
 子なる 飼ふも 乳母の 口 咄く  
 糸 懸ふ 子 引 進 心 細げ ぶ  
 藤子 きて 古く する 河川 一 女 森  
 かりし の おも ぶ 子 あり 孝子 たる 裕  
 爰を む 古く 凡 車 あり 心  
 又例の 八百 屋 法 示 法 一 十 あり 亭  
 美 下 秋 峰 生 兼 古 秋 下 古

狂言所は院乃流さるる  
 善哉引淡合やめく翰が可  
 ち如ん哉己の思ふ利責行々  
 秋田も川流王一月をみそろ沈  
 吾道をるも中折るべくまき  
 秘密るふかくあつるま物をも合  
 何のたかしい角里先生  
 取まらうたは曲者深あゝ飛  
 糸よりを寝て寄迎る海申  
 互先碁盤をかあも朽ぬへし  
 生 嶺 古 生 下 秋 舞 古 峯 生

照進は嫌しく降も又待つ  
 世界皆花あゝま記さぬ花心  
 種おろし初咲也に花娘  
 下 秋 華

二 星

志をぬえ位よりあつて星乃山岸  
 又  
 抱も寝をちぬおあまも星の志  
 全  
 竹竿煉

萬一路卯如冬月乃ひかまの志  
 富天  
 高亭壁上蕉翁の一軸と閑将軍は大刀より

賀才 昔々 子 梁子 虎 阿 子  
渭北の二字を申すれ机を

関 近き 眼を 山 領 子 毒 捨 來

返の 派 その 法 ちり 色 甚 名 色 浪 甚 分 外

其 梁 子 子 廣 乃 額 甚

葦 酒 入 山 門 蒿 亭 不 入 無 雅

夜 の 字 ね かり ぬ

白 子 出 くら の 子

三心 其 時 廣 去

人 の お せ り ら ぎ ち み 又 あ ぬ 子 女 不 出 子 女 不 出 那

勿 倫 親 移 子 不 出

叫 び 呼 び ぬ け け け 枯 珍 の 子

又

子 女 就 子 中 ね お 此 邊 の も の ね 飛

右 二 章 全

夏日高亭より仰見各探し題を

水 體

鯨の子はかへり花はあつたよる月

喚洞

早苗

美石乃見のふき青し夕あらし

舎仙

二上山嶽

眼より織りやこゆれば當麻蓮の糸

舎椿

水 鏡

いづるもよこしの子は勢はくは始る

只清

納 涼

冷 澁 冬 木 入 ち ち ぬ ち ぬ 美 子 家

其 梁

大仙陵自雨

夏 降 ち ち 和 泉 山 頂 の 首 乃 那

舎 仙

田 草

甘 踏 ち 腰 お 水 味 ち 眠 ち ち ち

只 清

螢

海 近 し ち ち の 子 ち 光 君

喚 洞

二重鯛魚

鮮 ち ち ち 貴 ち ち 涼 し 暮 ち ち 心

舎 椿

権井夏月

きけりりあふたて井新夏の暮

其梁

其梁雅兄文其室閑の古あを則

通歌寄春恋の公女

侍中松山

一懐る空懐ふは二思りねまか純

原多舎 春岐

梅

わさくちくちぬり親仔細毒如卷

全

全

尺白舟るくくの春暮人たは花

川

有隣

寝ぬ鹿乃夏のしるは相ふ雲

良夜

月小名水はのふを名所うる年

嘯園

照り系満多舞眠る舞鶴吟

其梁

早執負ハさそふさや難因身そ

全

ちるまもたそ如顔をけさる

園

黒甘名う山音死幽ふ雪日の窓

全

摺の原うら若さ大寒

梁

そりまよ山此心立うけまも道祖神

全

新しそ土産を屋入長家

園

傾城のく水の初そ乃明のちり

全

月より音へ中をきか 帆  
帆ハ子よりまう勢船も地より音  
秋を墨トし朱のおとる 銀  
小嵯峨の雲乃下人よしと  
獨樂よりけし 雁の音遠  
あつぬあつぬのさだむり  
茫睡よりあつぬき 艸花  
りんぼくもあつぬき 家り花  
みんまのさつぬき 井うら  
又笑ふゆ干産子の真鴨みち

梁 空 筒 空 空 梁 空 筒 空 梁

下公伽羅好まよふいゝお  
僭上縁乃返を子 醫者  
雲子好の笈のさつぬき 夕日報  
庭より子と路下と紫陽花  
何事なき作り画乃青ありし  
齒よりきむ着させ良雀うか  
縁とをよみんあつぬき 親仁の  
おのひ 摺りぬ 根敲るてはく  
月を今を園もあつぬき 斬つて

空 梁 空 空 筒 空 梁 空 筒 空 梁

つるより新地橋に飽く里  
暮きよき音あり念佛長う母  
目鏡を架撰りてと津  
黄昏のおもひに記ふる園に雨  
猫を移しひり吹矢四五本  
雪より移る花も深山より来  
永き日ありまゝあふふ系泡

園 梁 空 園 梁 全 執筆

文甚き飛をを賀して

梅白乙而 后をの音う那

喃園

着紫

谷隈より系より登りちる將

巴浪

涙雨

うそめ世よりとも古実の初時雨

全

春兵

擲合ふ世歎を風の卷う那

祖海

苦熱

顔子流ひ嵐のそ浪ちる暑さ変

全

寧景

そら煙より芦花うそふく寒さ変

如也

寄松志

あゝ此春子にぬおれに終哉

我主

梅

山根ゆく人の女次んたりの舞

遠里琴

若葉

日小あをうて替て樹ののみまふうか

月

舟をり出る人寒し峯の月

時雨

百千反  
ちかか  
日中  
流る  
久  
遠  
う  
奈

新樹

夏あまいつくも深山かきうか

踏芝

二星

降らるる宵よまほの如星如霜

浪華東武皇都又浪花を左海へ

老阿の自由自在富貴いふその中を

范蠡の玉か―を何そ仙為花

舎仙

校了

若夕

偶成

老玉しを水塩も甘華いしはらり

只清

山家吟

雲より入る人指さすもや蕨汁

捨東

五月雨

しみよ水也可愛らそうち子死ね

賀

浪卷

道そ至る此之盤乃山峰のかつゝ歌

李拙

梅

遠く鹿乃水也谷女ぬの花

三宅

石湖

賀文堂宛

晴也此巻を七片の追り金

李角

陽興

東武

春雨より益ううふく霞う那

柴齋

在所土在性也土筆以紙走

千石

如月報疏抄管宿よりし

只清

面白さうう下たう場亭

紫新

老あくとう月夜吟出古遠目鏡

子石

折片を了基下銀河ある

只清

下畧

早春吟

毎日如明六く巻一しんたのた

南紀

竹房

右一章ハ五十四巻之時中出ま

同

毎日の暮むつりもむめり義

里白

右一章ハ五十三巻之時中出ま

嵩高亭主人充海乃免音彦

得て文其室ひるきの女は延あふ

中絶

泉南

染る葉の中子充より由多し色

雙岷

賀文其室翁

幼花より葉より文も其室あま

芦冠

孤帆遠影ぬ夜懸る藤

其梁

杓り流岸手あ新去洲

秋助

窓のうら祝く居風呂の礼

月の乗る音も培像の新らま

牙

鳩の鳴きくさ岨り旅ハし

あまのつら肩ていとぬまを待

助

あまのつら肩ていとぬまを待

賀して去ぬハ僧正通昭きある

冠



あけ枝り光る雪の影は  
鳴きや浦の空より松乃山  
寺より霞一よ切らぬ 語

冠、助、尉

侍ふまをりつらぬ夜よいと  
何のゆゑうらうらうら  
飽むをれ象<sup>キガ</sup>は中山花の雪  
長閑なり見ゆる石上り亀

五彩堂  
紙筆

増年

永き根や斬端くもぬき岩

下物

田家

標 陰路を眠る居る家  
立置子曲五人早苗吹く  
たあかその旅生サ雑乃毒味し  
ふあはらの孝哥よよき徳也  
蒔ちくもるも月の能く  
蕃椒系瓜小き水ひ子  
浦乃深山北秋よりおと  
焼くくあまの多羅葉の雲  
海を志琉球へ送るもるの

捨來 其梁 只清 来 梁 清 来 清 梁 清



一目負の鼻下を 子路  
風交子高く吹井を 當加馬  
璞瓦化糖瓦佛甲妙海む  
人見ろくわくうきく餅にききひる  
而夢想の笑もはつあつりそ  
道より川 札交子世り冬の橋  
り多ふ妙も睦き一た老

寒景

鷺一のあふみり君が枯跡の糸

其梁

海邊眺亭

老風や衣庫を為出る雲の毛

夏里

納涼

水もあふりう流や存涼一橋り上

七夕

星小か勢幾お正本りみ枕

初冬

涼飽く曇りあきれきく水うか

良夜清光

樹より葉下綿着て月を母之如

又之

雨意

向ふ如き力を硯より雲に筆

よりし 虫風より洋々

亭ハ先心よりちとて春梅と

つとて程目懐く具中茶酒

長き杖をいつと夏と曉の春

琴柱程より川越る雁

雪物のこころ初く嵐の春

世々の心方神もある村

むやみと蘭で拾ひし一院袋

亞光

其梁

操之

春湘

桑女

淇竹

光

之

湘

好み通しと緞子より杖

悪んとな軒より流らるる世めり水

山より真よりもみハ心よりやら

大岳月より敲りて後一待

春露を取子ほどく乗物

若合も糸瓜より皮を焙録の虫

あてハ去也 常釜

うた交し花より雪井を巻鑑

ちのりの子を茶を唐僧より眉

二 茶みしと茶芥子のきとて海軍汗

女

竹

光

之

水

女

光

舟

之

水

あつりぬ旅もはゆき  
 手ふ撲日かきしりハ  
 新く深うとかきしり  
 紫陽子の雲あつちり  
 硝子ぬく頼いふあ  
 小利か葉之藪子旋  
 鮎より出ひ一尺屋の  
 蛸壺り丹と鉄ふ暴風  
 虚空を長あむを  
 ちりしり河の間よ  
 ちりしり河の間よ

女 升 光 之 湘 女 竹 光 之 水

雁一休中右海のさ  
 二言もいり民多  
 系脈育る報つ  
 兵衣交りて  
 造りて  
 曲事を花昔の葉  
 夕日斜り

雁一休中右海のさ  
 二言もいり民多  
 系脈育る報つ  
 兵衣交りて  
 造りて  
 曲事を花昔の葉  
 夕日斜り

女 升 光 之 湘 女 竹

五月福

雨鼻月影と小糸毫く

桑女

秋意

名月也教かゝる園より庭垣離

多子

空と跡は色を限りて遠くを

淇弁

珍業

思出り跡も娘の葉の老りも

鵜河

結のむ糸も月もふさふさ拾ひ

亞光

郊外

晴まきまきるをり柿の核棹

賀

日也月也照りま替松り雪出ると

春湘

孤村

浦はふるや卯の花垣も破垣

良夜徐歩吟

鷹より撲せり世は去る月の玉

思恋

吹消して跡もくさる如流のこゑ

時雨

あせ勝たるとは珠文小まき

東籬

春真

連翹り霞子志はく 藤珠の家  
文車也際ふり花を 花を使ひ

都石

夏

扱去春の雪より早き 初音のふ  
日ちあそび 弦子 慙う如 舟婦人

秋 山踏

東は是より出るまあり 入日うま  
白浪や月のふも如 深みうま

冬

まゆくを如 木をさく 移れ枯尾花

うか見勢

川子高き年を 空寝 花を 渡

祝言

月子日下子 穴乃 葉を 如 神の 舞

倦夜詠風

花子 陶く 如 阿走の 志を 秋女 上

其果

寄魚志

たおさが 下 鮎の け 糸を 昏乃 斬

只情

賀文書簡

四寸牙 終ひらくも 葉は花は肩  
枝より 枝へ 申川 名義の月  
岩間 道はのをも さまも 深み ち  
画と 赤くく 川を 抱く 村  
掃と 縁撮く 放り 時多し 棘  
篋子 之 遠 理 如り 都より 入 進ん  
逢ふ ち 大の 事 凡 呵 なる かけ  
思ひ 路も 月も 枕 糸 瓜 柳

蘇星  
蘭山  
雪山  
大青  
酒水  
一竹  
葉山  
後里  
大青

珍、之 意 志 々 世 井 乃 去 瓦  
初 湖 の 水 一 を 音 あり 硯 石  
思 葉 う の 片 くと 不 降 の 初  
嵐 追 ふ ち 軸 座 禪 妙 孫 を 飛 び  
う さ も ち 々 々 玉 板 庵 乃 灯  
補 葉 う ち 或 ち 仲 居 ち 身 乃  
ふ ち ち ち 目 進 ち 執 力 也 代 筆  
何 子 此 ち 代 ち も 花 ち ち ち ち ち ち  
去 年 の 葉 乃 流 乃 雪 解

雪山  
葉山  
正名  
一竹

下畧

賀

手成り言下玉を梅の冬

雪山

全

其日そは年りめくみき梅本梅

酒水

全

代より猶うけたり也素乃明鳥

大音

全

押親り増き言ふ手拙うき

一舟

全

言の葉如一字也子より金浪花

葉山

寄松意

袖引也手と手幾子代初みと季

後里

梅

星途不雪も白く梅乃えみ

二竹

時雨

童田娘ささむ物少初時

葉山

月

半川の雪乳房を舞へ津如月

雪山

全

そらふら樹々如雪見や夏乃月

酒水

春

一葉ちるるあり相れぬ雲雀

惟風

夏

卯如冬やふたありをつ松の芽

秋

空廣し地はうの森り月の隈

冬

木枯子をかき扱る寝さめ哉

新樹

あかあ樹はる夜の多葉うか

三果

毒

よちみちる風の在りも梅り輝

季風

若葉

風そよる葉り海原も花みち

月

静くもさるや空盤の峯の月

時

付ももり花みち

春の松窓

うそはるる恋をいく春娘小春

観

ある舟や園より暮月如細

圖南

賀

まねたるの女子世のまね如春たると

梅窓

旬意

るより沙汰ふくしてまねの時雨の香

徐歩

の梅をく水を集ふは浦り毛

鼻月

日を待たぬ雨のあまらちりま

夏二章

梅の毛山にも似るるまゝ葉のうさ

捨来

あまらるる水より出る涼みの那

良夜

空より文字かくおきくは移る

十三歌

花はもあまを二葉あは後り月

二葉

蓬葉の老て交り籠 九日栗

喚洞

擔りよるはふもまゝく尾总系

竿秋

嵩高亭好日真奥の行脚友やうし  
 阿命を志すにこれ時日を終るる後  
 立一の一集を選ある其意少くは  
 一みく入の家改ふるとや世を古き  
 弘雅藝ふく親しき上より人をいひ  
 四玉衣雪子ぬいせを籠を祝しけり  
 よれたる日中け 讓りぬ 留 李花 辰花 下物

名月

月一橋をくや 松や月を登り  
 山嵐三五り夜  
 分分

水

川也此雪を流す五月雨 只清  
 雲子端なく浮葉も音 其深  
 温泉入幕那古のみきを深き  
 吉彌をさむし月をく之 清  
 月の空 夜を 松を 八 笛  
 呵くはあふ 猫 乃 百 落 梁  
 始く火子やうき 秋葉山  
 旅する川をひ出し 常好を 深

子履よりおのゝとる路  
 阿波淡路障里ふり雲晴る雲  
 雲晴るこつち細二名僧  
 跡る教の一丈飛びし糸篋箱  
 遊るもたゞしく唇のくさり  
 朝平朝平汝をいんふおれ  
 花のむろしり香炉立牧  
 去盛日由るした弁輿を足歩  
 友待つ縁る素良の爪音  
 山伏乃後生就ひえたがもふた

梁、清、梁、清、梁、清、梁

蓮生り極上り推草  
 象限も死地斗ふる不二の虹  
 蔓河しけふも及まきる太刀  
 口くくも也押込隠居渡り  
 望椿見しそち道ありん  
 金たしむるの上つる方素と  
 小ののみむるを神切皇后  
 森ちと歴て森へ入るありあし  
 層層お好り肉子居お好き  
 根向ひあきらむ月あま

清、梁、清、梁、清、梁、清

公うろくし（虫）ありあはぬ  
 飢きるは粒吹き吹きあし  
 市子手桶はこぼれぬ  
 あまのつ子恋しうらむる神代人  
 おもひをぬれぬはあまのつ子  
 まわし見るまじり星あまのつ子の  
 春いくみより 壽きき日

梁、清、梁、執筆

初雪のあとこき別下入日の節

嗅洞

梅

物の間下合少人向やむめは美

脩竹菴

干合

若葉

箔代もまじりた寺院のみまふ

月

名月やうそはうぬ友うそあき扱

久禮

時ふ来つり月ひのこ臨濟派

感懐

染てあまる葉もあまふは紙子扱

分外

過寺前

春雨り糸より細く磬のをと

里雄

首夏

夏返り雪の妻丈人雪如峰

良夜

四月は闇を晒き死椿り陰

偶成

抱筆の海の家き心や敷の糸

其梁

春日旋花洛菴

菜の花や嘘涙をかきりり東山

竿秋

霜題

梅

待り春川歌詠老女んめの花

石室

ワのそ

二本や伊勢へ行くきみあふ笠

月

あやあやおはまありて二日月

雲

いんぬや遠つ海るり運ひ雲

寄松恋

ちきうちきう松恋隠り暮雪の明

明をふに悴けの園や梅の跡

多葉

しと園也やととふ路るり湖ちりけ

中跡

しと啼けし蝉を撮すんて月んか

雲

照痛をえぬ十月りりつくう南

右四章

皂央

如月中の九日鶴嶺を乞きて廣本乃

市坊ふ宿す其おるふあまき

待花の乳房をい<sup>唯</sup>の玉旅あるふふふ

夙子眼覺ぬん縁端よ坐りか檻子倚

長き致景を眺む小るをいぬぬ衣を

あそいりちか<sup>唯</sup>未津川目下り流る

ちちりや赤風よふ秋櫻さく小あ

己の刺をうりふ高眺り舟り乗あう

下り中ふを降山ふる

るり任つ曇を秋の乳おちる舟

興道記

古今集詠諧歌

柿のり心見とこそき法蓮學乃心と  
といひしはた

世人皆公裏かくみこし

一 玄旨法京光廣は市家法之事凡日は

一本ふ番し其申よ

一 古今集おてり作者ハいつ世と定家ハ一勅問

傍西通眼と勅答

まことまふきといふとあれはそんこそ歌と

いふものあれ

一 玄理詠諧ハ身よりハ法よりハ心よりハ身よりハ心より

光廣ハ清談あり一奉朽瑞よりハ一旅

如建ををいひしは二十八年前不惑乃春

三月九日東林藤の分片庵に入菜榆菜ありを

掬し居士衣の蔽たるを厭り安下畧

是きこをまめ庵老林一派無立此遠

源也高く仰たぬうく味ふへ一幸何見

く一集有在海乃波乃起り磯の荒深

如ありし一かるに撥ひて返の榮を千

歳よりおごさんめきし程ををる様と  
あー益律き心越え銀河波空ふる  
末縁也如十一旅心光孝永くかや  
幸まふと

只法云

明味五年仲秋

閏九月越院川訖

後下う帆かきあき月お尾花うあ

喚洞

明日宿の裏より中下入るを後

芸梁

探幽の一筆画キを後ふ孝亭

舎仙

あふか白くも越ふ斜院坊

舎樽

君考るに蘆をひき路海ありきり

梁

あふかまる共表も程く青柳

仙

大勢の疎ふーあはは暮う年以

樽

あふかけハ薄茶乾かへる程

洞

幸縁也實隆云々ハ市短冊

梁

其間の琴を僧り代弾  
 暖あを子あゆく後表翻  
 解く度子も子るある月  
 病を如して水岩くらか遊遊ひ  
 一字書くハ茶餅一枚  
 神子の降臨の由言ふ杉手桶  
 移らぬ如る嵐遊ふ蛇  
 是をきらるるも容あきや一花  
 橋海昔まて主海打く出ま  
 三如間を標山く返ぬハ折之へ

梁、仙、洞、持、仙、梁

中川里か河也るかさか建る山  
 唐多子 柳素麻赤る大味落  
 あまき麻乃を毛つの一花登  
 赤南舞の餘念も替はん写定字  
 色 野も一花 只りことか  
 去て一あのおうく 拍子渡一舟  
 明くん見あき見あるる言  
 因好目ぬあを市意之胡の月  
 此法 獨樂も秋を舞のうち  
 稻妻子 暖家も手ふる指り寮

梁、持、洞、仙、持、仙、洞、持、仙、梁

摩也ハまじく如母との非時  
 川子石虫古車ひきまき  
 室へいりくさばくは枝  
 ぬめきやせ級赤使り不性仁  
 こ種の六祖を味うらん  
 陸奥り子を出もさくりを花の集  
 浪をあらさんと華世ふる  
 梁 洞 棹 果 仙 棹 執筆



泉界人其梁子嚮者師半時菴而學  
 誹諧酷嗜之終得究其奧義半時菴  
 將沒也授以平生所藏之秘記於是乎  
 其梁子之調益高殆寡和者屬者其  
 梁子頌數題廣請四方作者將輯為一  
 冊子以垂不朽蓋聿脩師業之意也余  
 亦見微然素不肄不能賦隻字因賦詩  
 代之姑塞其需云

梅

郢樹先春，不違一庭素艷，弄寒威暗。  
香月裏鶯堪宿，疎影風前鶴欲飛。謝  
客瓊瑤空借色，石崇桃李浸爭輝。清  
幽應是為詩，祭羯鼓何須屬世機。

又

何遜宅中雪樹間，韶景回色欺新製。斲  
香入欵啣杯，驛使春相贈。佳人月自來

垂，如識我莫使白頭催。

又

白玉糝成笑，向人烟籠月洗淺。春新中  
宵夢斷，何情況踈影入篇，疑是神

又

應期姑射伴，神仙五出花開六出。鮮別  
有清幽春色，在誰憐粉黛，宋時妍

若葉

玉律陽和動，飲之艸樹蒼。  
新條雨作芽，嫩葉烟為糝。  
日照輕光湧，風搖碎影揚。  
蝶飛猶護粉，鶯轉未爭簧。  
楚賦王孫恨，豳風蠶女傷。  
江南春次第，從此幾尋芳。

春

桃李枝頭壁彩深，氤氳幽霧濕春心。  
嬌

娥不管花開落，獨抱廣寒宮裏衾。

夏

雨餘天淡火雲閑，銀月窺人綠樹間。  
素影滿庭風露冷，豪遊何用築冰山。

秋

玉宇無雲掛素輝，金風萬里桂香飛。  
扇紈堪比團圓色，班女宮中兩濕衣。

玉宇無雲掛素輝

玉鏡掛天寒更幽金波滿地凍難流誰  
家吹斷梅前笛恰作中愁賦裏愁

寄松戀

落落真松雪不侵仙標長托巫山岑雨  
中翠色思眉黛風外清聲憶玉琴百  
匝無情蘿帶亂双栖有夢鶴巢深良  
緣千歲應須比芳槿誰憐旦暮心

時雨

江南葉盡九秋徂雨去雨來天氣殊四野  
愁雲迴望合千山返照入看無村橋叢  
影沈驅犢水寺鐘聲慘送烏最是吟  
中堪弄處絕勝高閣捲簾朱

湯川梅泉齋





